

香港の教育選抜について：その構造と動向

香港中文大学

劉恩慈

The Chinese University of Hong Kong

はじめに

本報告は、香港において、1978年に施行された9年義務教育による教育の大衆化に迎え、教育選抜システムはどのような構造的な変化をしてきたのかについて検討したい。分析の視点としてJ・ローゼンバウムのトーナメント型の移動様式概念を手掛かりにして考察していきたい。

選抜システムの分析は、R・ターナーの競争移動と庇護移動の概念が移動規範の考察に有効であるが、移動規範と実際の移動様式の間にズレが生じる場合が多い。トーナメント移動モデルによれば、継続的な選抜システムにおける各試合の結果が一つのシグナルとして勝敗者に付与されて次の試合に影響を及ぼす。また、勝利＝能力というシグナリング効果が累積し、それによるラベリングの増幅効果が働き、選抜を勝ち抜くことができる。

香港の教育システム

現在、中等教育までの学校教育は教育署が統括している。教育体制は、小学校が6年、中学校が5年プラス2年のシクス・フォーム、大学が3年となっている。義務教育は中学3年までの9年間である。学校の種類は公立、私立補助、私立独立に分けることができる。私立補助の学校は香港の学校の大多数を占めており、学校の運営は教会などの民間組織によるが、運営資金は政府からの援助で賄っているのである。学校の数、小学校が約700校、中学校が約500校、大学が7校ある。製造業から金融業への産業構造の再編による高学歴の人材要請を背景にし、9年の義務教育が1978年に施行された。それによって、カリキュラムや教員や学校設備が画一化され、クラス生徒が同質化とされる。つまり、学校間の格差による教育機会の不平等を最小限に減らす。従って、選抜の勝敗は生徒個人の努力または能力に帰属するのである。

選抜システム

従来、教育事業に関して政府の役割はエリート養成にある。よって香港の教育体制はエリート教育として特徴づけられる。義務教育が施行される以前に、香港の教育選抜システムは「中学入学試験」(11+)・「中学教育証書試験」(O Level)・「高等教育証書試験」(A Level)の3回の統一試験によって構成されていた。「中学入学試験」は小学校から中学校へ進学するための最初の選抜であった。次は中学五年を終えた時点で行われる資格試験であり、その成績によってシクス・フォームに進学する。最後は大学入学資格のためのAレベルの試験となる。

統一試験は、選抜と排除の観点において公平で客観的で効率的な方法といえる。個人は努力さえすれば、たとえ成績下位の学校の出身であっても、選抜を勝ち抜くことが可能である。言わば、統一試験は個人の能力に帰属する選抜方法であると考えられる。

義務教育が施行されてから、「中学入学試験」の代わりに「中学学位分配方法」と「初中成績評核方法」という選抜システムを導入した。前者は小学校卒業生を中学へ配分するシステムで、後者は中学3年、義務教育が終了するときに、中学4年へ進学するための選抜である。

考察

まず、「中学学位分配方法」はどのように行われるか見ていくことにする。この方法は統一試験によらず、評価の規準が主に学内の成績に基づくのである。成績は5年下半期と6年の全学年の期末試験から構成される。生徒全員は成績順で配列されていく。しかし、学校ごとに評価方法や規準が一樣ではないので、このまま学校間の成績の比較ができない。学校間の評価の格差を是正するため、生徒全員は統一の学力試験を受けなければなら

ない。これは学科試験ではなく、生徒の学力を測定するものであり、いわばIQテストのようなものである。同じ学校の生徒全員の成績を総合して、同じ学区内にある小学校に成績順位を付ける。例えば、A校とE校の学力試験における総合成績が同じであれば、両校の学内成績の評価尺度が同じであると見なされる。それゆえ、学力試験の成績は生徒個人のみでなく、所属学校の順番づけに影響を与えるのである。そして、同じ学区内の生徒を成績順で5つのカテゴリーに均等に(20%ずつ)振り分ける。カテゴリー1は成績が最も優秀で、カテゴリー5は成績が最も下位にある。カテゴリー1の生徒は優先的に希望の中学校を選択することができ、最も下位にいるカテゴリー5の生徒は上の4つのカテゴリーの生徒が選択して残った中学校を選ばざるを得なくなる。この配置方法の利点は統一試験による生徒への圧力を減らし、学内の成績により正確な評価を下すことができる。その反面、教師の主観的な判断によって評価の不公平さが表れることがある。学力試験は生徒の学科知識をテストするのではなく、学力を測定するものであり、言わば、生徒の将来における学習の潜在能力を予測する意味が含まれる。それによるラベリングの効果が大きい。競争試験は生徒にかかる圧力が重い、個人の努力によって成功することが可能である。このカテゴリー化に対し、現行の配置方法は学力試験で、個人の成績だけでなく、ほかの同級生全員の成績が良くなければ、上位のカテゴリーに登ることができない。つまり、上位のカテゴリーに入ろうとすれば、優秀な学生が集まりそうな小学校に入ることが先決条件となってくる。従って、学校効果は一層に強まることになる。

以上の配置方法で小学卒業生はそれぞれ成績の点数を与えられ、カテゴリー順で中学校へ入学する。しかし、「中学学位分配方法」における成績の効用はそれ以降、なくなるわけではない。この成績は中学3年における「初中成績評核方法」に対しても影響を与える。

「初中成績評核方法」は一部の中学3年生を

政府の援助で中学4年に進学させるための選抜方法である。「中学学位分配方法」と同じく、選抜の規準は統一試験によらず、学内の成績に基づくものである。中学4年への進学率は学校によって異なる。進学率は基本的に生徒の3年前に取得した「中学学位分配方法」の成績によって決められる。簡単に言えば、「中学学位分配方法」において上位のカテゴリーの成績を取る生徒が多くいればいるほど、中学4年への進学率が高くなるのである。例えば、現在の中学4年は中学3年の生徒の6割しか吸収できなければ、カテゴリー3以上の生徒を多く集めれば集めるほど、進学率が高くなるのである。従って、ある学校にカテゴリー3以上の生徒が半数以上いれば、進学率は50%以上となるわけである。しかし、この進学率は生徒個人に帰属するものではない。言い換えると、カテゴリー1の成績を取った生徒は3年後に必ず中学4年に進学できる保証はない。例えば、この学生が50%の進学率の中学校に入ったとしよう。彼は中学3年のときに、同じ学級上位半数の成績を取らなければ進学できない。つまり、中学1年に入るとき、すでに3年後の学級全体の進学率がおおむね決まっており、今後の3年間にこの進学率の枠内で同級生と競争することになる仕組みである。1993年の「初中成績評核方法」の結果によれば、約2割の中学校は最上位のカテゴリーの生徒を集められたため、進学率が95%以上達した。それゆえ、「初中成績評核方法」の選抜から免除され、生徒全員が進学することになった。つまり、初期の選抜でカテゴリー1の成績を取得すれば、Oレベルまでの進学が保証されることになる。

義務教育の実施によって、進学か就職かというクリティカルな選抜は小学6年から中学5年へ延期し、競争移動規範のように教育の機会がより開かれているように見える。しかし、初期の選抜の結果がその生徒の能力のシグナルとしてそれ以降の選抜の評価の一部となり、事実上、選抜が依然として早期に行われることになる。